

5. 人間の本質（三分説、霊の話）

昔から見えない世界に対して恐怖心や不安を感じたりしていた。霊魂は存在するのか？

人間の構造について以下の二論が唱えられている。宗教に心のよりどころを追い求める人もいる。

- ・ 唯物論—肉体のみ
- ・ 二分説—肉体と精神（心）

では心の次元で満足しても何か空しいものが無いのか？

三分説…肉体と心と霊魂

〈コリント人への第二の手紙 4 : 16~18〉

…外なる人は肉体だとわかるが、内なる人とは？

〈ローマ人への手紙 7 : 22~25〉

〈テサロニケ人への第一の手紙 5 : 23〉

〈コリント人への第一の手紙 15 : 44〉

霊のからだもある

〈へブル人への手紙 4 : 12〉

御言葉は精神と霊魂・間接（骨質）と骨髄・心の思い・志（霊魂の思い）を切り離す

<人間が求めるもの>

肉体—本能的欲求（食欲・性欲・睡眠欲）

精神（心）—知（学問）・情（美）・意（善）

霊魂—真理、知恵、愛、文化、芸術

心理学的にも霊魂の欲求があると言われる。

<マズローの五段階の法則>

生理的欲求（肉）→安全欲求（肉）→所属欲（心）→承認欲（心）→自己実現（霊）

承認欲までは満たす人がいるが、自己実現が難しい。自分は何のために生まれてきたのか、死んだらどうなるのか等、わからないことがある。

植物—生魂（しょうこん：細胞）

動物—生魂+覚魂（かくこん：感情）

人間—生魂+覚魂+霊魂

〈マタイによる福音書 4 : 4〉

人はパンだけで生きるのではなく、御言葉で生きる

霊魂のご飯は御言葉。自分の霊魂を活かすために御言葉を聞かなければならない。

〈伝道の書 12 : 7〉

ちり（肉体）は土に帰り、霊は神様に帰る。心も死んだら消える。肉体があると直接御言葉を聞けるので、早く成長する。肉体の人生は 80 年だが、霊魂は永遠。

赤ん坊は 10 ヶ月の間母胎の中にいるが、そのときどう過ごしたかが、生まれてからも左右する（母親が喫煙や飲酒、放射能を浴びてしていると大変）。同様に肉体があるときにどう過ごすかが霊魂だけになった時に影響する。

〈ヨハネによる福音書 6 : 63〉

人を生かすものは霊であって、肉体は何の役にもたない。

〈へブル人への手紙 8 : 4~5〉

地上界は霊界のひな型（コピー）。だから霊魂と肉体は密接に関係している。肉体は霊魂の思いを成し遂げるためにある。人間が神様の思いを成し遂げるためにある。

霊：肉=51 : 49 本当に勤勉な人は自分のすべきことをすべき時にする人。霊的に投資して真理を蓄えた上で、肉を使って神様の御心をなす。

〈アモス書 8 : 11~13〉

食料の飢饉ではなく御言葉の飢饉がある。自己実現を求めて人はこなたかなたへはせまわる。

〈ヨハネによる福音書 5 : 24〉

永遠の命＝霊魂が永遠に生きる。

日常生活の中で悟って霊魂が成長しなくても無いが、キリストが伝える御言葉を聞いてのみ、霊魂が満たされる。

〈伝道の書 12 : 1〉

あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ。体が動くときではないと御言葉を聞いて実践できない。肉体を持っているときにどう生きるか。

〈マタイによる福音書 6 : 33〉

まず神の国とその義を求めなさい。

御言葉を中心にするのは、まずは土台を構築しなければならない。霊魂を成長させるため拘束されるのではなく、もっと大きく使われるための練達。Rも最初は祈りの生活だったが、今はサッカーを初めとしたスポーツや文化・芸術もやっている。

〈ローマ人への手紙 12 : 1〉

霊魂・心・肉体を清くして完全に。

御言葉を聞いていることとそれを伝える人がいることに感謝しないといけない。